

藤

並の森



▲9歳頃の平井憲太郎さんと江戸川乱歩。記者の求めに応じて一緒にカメラにおさまることも多かったという。(写真提供/平井憲太郎)

リレー随筆

文豪ストレイドッグスの乱歩君

平井憲太郎

私は一九五〇年九月の生まれなので、祖父江戸川乱歩が五五歳の時、と言うことになる。すでに八〇歳近かった祖父の母、祖母、両親に私を加えて六人が同じ家で暮らしていた。戦後の困窮も収まり始めた頃で、住まいがあった池袋にはまだヤミ市と呼ばれる復興マーケットがあったり、焼け跡の空き地が散在していたりと、戦争の残滓も見られたものの、世間はかなり落ち着きを取り戻した時代だった。

私が初孫だったためではあるが、祖父はあくまでも「優しいおじいちゃん」であった。カメラをいたずらしている内に、元に戻らなくなつて悪戦苦闘する私に、叱ることもなく簡単に直してくれたり、家族ぐるみでお付き合いしていた作家仲間での歌舞伎鑑賞に連れて行ってくれたり、と思いは数多い。もともと歌舞伎は子供には高尚すぎて、幕間の弁当だけが楽しみだったのも、事実であった。

その当時の祖父は、少年向けの連載以外の創作はほとんど行っていなかったが、それ以外の活動が多くて、多忙な日々を送っていたし、映画や演劇などの二次使用も次々にあった時期である。その有名な例が、三島由紀夫氏が脚本を書いた「黒

蜥蜴」である。トリックや時代設定は原作を倣っているが、ストリーアの流れや土地の設定は大きく変えられた。しかし、祖父はこの脚本に対して、子供っぽい冒険ものを大人の物語に変えてくれた、と絶賛し、現在も再演が続く名作となった。祖父が亡くなって著作権の管理が私の父の代になってからはストリーアやキャラクターの改変については広く認める方針を取ってきたと考えている。

ところで、今回の展示はコミックスである「文豪ストレイドッグス」に登場する「江戸川乱歩」が主役と聞いている。私自身はコミックスが苦手で、この文章を書くに当たってこのコミックスを四巻ほど買い込んで読んでみたが、恥ずかしいのだがどうもついて行けない。祖父も、まさか自分自身がコミックスで異能者に負けぬ活躍をみせるキャラクターになるうとは思ひもなかっただろうが、このシチュエーション、結構楽しんでるに違いない。今夏、所用があつてタイのバンコクを訪れた折り、市内の巨大ショッピングモールで「文スト」カフェを見かけた。世界に羽ばたく乱歩君は、本人が夢見た世界なのかもしれない。

(江戸川乱歩(令孫)「とれいん」社主)

江戸川乱歩の華麗なる本棚

文豪ストレイドッグス × 高知県立文学館

BUNGO STRAY DOGS

注目の企画展を
ご紹介します!



▲会場の様子

若い世代を中心に圧倒的な人気を誇る『文豪ストレイドッグス』。

2018年春には映画「文豪ストレイドッグス DEAD APPLE(デッドアップル)」が公開され、テレビシリーズ第3シーズンも制作決定となるなど、その人気はとどまるところを知りません。

実際の文豪の名を冠したキャラクターたちがそれぞれ迷い、悩みながら「生きかた」を模索していく本作は私たちの心に深い共鳴をもたらし、多くの若い世代に実際の文豪作品に親しむきっかけを与えてくれました。

全国の文学館が「文豪ストレイドッグス」に注目していますが、高知県立文学館では「文豪ストレイドッグス」に登場する多彩なキャラクターのなかでも「江戸川乱歩」に注目し、四国初となるコラボ展を開催いたしました。

江戸川乱歩は当館の顕彰作家にとつて縁の深い人物です。

少年時代の乱歩が夢中になって読んだ「幽霊塔」「白髪鬼」などの海外ミステリーを翻案し「日本探偵小説の元祖」といわれた黒岩涙香(1862-1920)。

雑誌「新青年」の初代編集長として乱歩を発掘し、横溝正史、夢野久作、甲賀三郎らを育て「日本探偵小説の父」と呼ばれた森下雨村(1890-1965)。

この二人は高知県出身であり、当館には涙香・雨村が残した貴重な資料が多数収蔵されています。本展ではこれらの収蔵資料もご紹介し、江戸川乱歩の業績や、乱歩が読んで・書いて・歩んできた探偵小説、推理小説の楽しさをご紹介します。

会場では、関係者のご協力のもと「文豪ストレイドッグス」の描き下ろしイラストや名場面紹介、撮影コーナーなどを設置。近隣施設にもご協力いただいてスタンプラリーも開催し、県内外から熱心な文ストファンもお越しくださるなど、たくさんのお客様で賑わっています。

また、11月18日(日)には江戸川乱歩のご令孫である平井憲太郎さんをお招きして記念講演会を開催しました。

講演では、乱歩と約15年間を同じ家で過ごした平井さんならではの視点で、豊富な家族写真とともに江戸川乱歩の生涯や土蔵の思い出、乱歩の好物や声などを軽快な語り口でお話いただきました。講演後は

この日のために県外から駆けつけた熱心な乱歩ファンらとの交流にも応じていただき、平井さんのお人柄で会場は温かな空気に包まれていました。



▲講演会の様子

乱歩をテーマにした企画展らしく、簡単な謎解きを交えて高知と乱歩の関わりをご紹介している本展は年末年始の休みをはさんで1月14日(月・祝)まで開催します。この冬は、魅力あふれる「文豪ストレイドッグス」の世界を堪能しつつ、探偵小説の面白さや高知の文学の奥深さをお楽しみください。(学芸課/福富陽子)



展覧会を盛り上げる多彩な関連企画も随時開催中! 詳細は裏表紙のカレンダーをご覧ください。

2018年

2019年

11.17(土) ▶ 1.14(月・祝)

午前9時 ~ 午後5時 (入館は午後4時30分まで)

★観覧料 500円(常設展含む) 高校生以下無料/20名以上の団体は2割引
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳
をお持ちの方とその介護者(1名)、高知県及び高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。

寅彦先生に学ぶ天災展

天災は忘れられたる頃来る

好評のうちに閉幕！

展覧会報告！

寺田寅彦先生誕140年を記念し「天災」をテーマに紹介した企画展「寅彦先生に学ぶ天災展 天災は忘れられたる頃来る」が、11月4日で閉幕しました。



この展覧会では、多彩な魅力を持つている寺田寅彦に親しんでもらいたいという意図のもと、『先生と僕』などで知られる漫画家の香日ゆらさんの素敵なイラストと共に、寅彦先生が話しかけているように口語で作ったパネルを作成しました。文学散歩パネルでは高知コア研究所の谷川亘氏にご協力いただき、寅彦ゆかりの地のほか県内の地震津波碑を紹介し、併せて地震津波碑の3Dモデルも設置。

展示室には福岡県のみやこ町歴史民俗博物館からお借りした小宮豊隆あての「震災

絵はがき」に加え、普段はあまり展示の機会がない当館所蔵の寅彦直筆の科学論文やご遺族からの最近の寄贈資料など充実した展示内容となり、すぐれた研究者として、そして父としての寅彦の一面が見られると好評でした。

さらに、平成29年度の高知県の防災教育拠点校の成果品を紹介したコーナーについては、各校の防災教育のレベルの高さや郷土愛に対して感動の声をいただきました。

さまざまな関連企画も好評でした。「いま、寅彦先生に学ぶこと」と題して科学と文学をつなぐユニークなお話をしてくださった早稲田大学名誉教授の千葉俊二先生の記念講演会は、会の終了後も熱心な若い方が質問に来られ、寅彦人気を改めて実感しました。高知みらい科学館と共催で行っ



▲千葉俊二氏記念講演会

たサイエンスショーは、みらい科学館の岡田さんによる実験、また地震体験車と楽しさ満載。その他、寅彦の随筆「石油ランブ」にちなんで企画したランプシェード作り、クイズイベント、寅彦作品を読む朗読の会、寅彦記念館友の会の山本会長協力の会、寅彦記念館友の会の山本会長協力のもと行ったミニ実験イベント付きのおはなしキャラバン、ティーチャーズデイなど多彩なイベントで、幅広い方々にお楽しみいただきました。

今回は普段の文学館と違って科学や防災に関する分野のご紹介ができ、小学生からご年配の方まで幅広い世代に来ていただいた展覧会となりました。

展覧会を支えてくださった多くの皆様にご心より御礼申し上げます。

(学芸課/川島禎子)



▲展示解説風景

常設展虫めが

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。

今年度は「反骨の大衆文学」コーナー・田中貢太郎、「現代の文学」コーナー・大原富枝、「近現代の詩歌」コーナー・浜田波静をご紹介します。

展示作家紹介 浜田波静

土佐近代俳句の先駆者・浜田波静は1870（明治3）年、現在の南国市前浜に生まれました。波静が俳句に出会ったのは15、6歳の頃。村で行われていた月並会に2年ほど参加し、句作に励んだといえます。18歳の頃から東京に遊学し、就学中に「小日本」に子規選で俳句が掲載されました。

学業を終え帰郷した後は、家業のかたわら「土佐七字会」を興し、正岡子規の提唱した日本派を高知に広めました。1910（明治43）年、全国行脚の河東碧梧桐を迎えて歓迎に勤め、以後は新傾向俳句に打ち込み、雑誌「日本及日本人」で活躍しました。

展示コーナーの最初に展示している大きな卒業証書は、慶應義塾卒業時のもの。波静が東京遊学時代のことはあまり知られていません。向学心の強かった波静は、1889（明治22）年18歳の頃、家族に無断で上京。兄の計らいで牛込区東五軒町（現在の新宿区）の親戚の家に居候することとなり、1895年までの6年間をここで過ごし、学問に励みました。

波静が最初に入学したのは九段中坂の国語伝習所。ここは官学受験生のための予備校・大成学館に併設されたもので、講師には歌人の落合直文を中心に著名な国語国文学者たちがいました。＊1 国語伝習所で学んだ後、慶應義塾に入塾。当時の慶應義塾は正科と大学部があり、波静が入塾したのは正科でした。入塾年ははっきりしませんが、



シリーズで、変わる
常設展示をご紹介します！

が、当時の正科の就業年数は6年で、1895（明治28）年に卒業していることから、1890（明治23）年7月に国語伝習所卒業後すぐに入塾したものと考えられます。「慶應義塾中中之約束」の「教授の規則」には他学で学んだ場合、試験をして編入する級を決めるとあるので、国語伝習所での学業を加味し、途中の級からの入塾となったのでしょうか。

慶應義塾正科に入塾した波静は、ここで英語、物理学や歴史、日本作文の他、国際法など幅広い学問を学び、その見識を広めました。

就学中、1894（明治27）年2月の「小日本」の子規選の俳句募集に応募。「春雨やひとり徒然草をよむ」の句が最高位の天位に選ばれました。その後もたびたび投稿句が選ばれ、同年9月号に掲載された「近江路や湖水の上の天の川」の句では子規から「大観以て賞すべし」と評されました。

1895（明治28）年7月慶應義塾卒業後、帰郷。高知市堺町で生糸商を営むもうまくゆかず、書籍商・保険会社勤務、製糖会社と職を転じながら、生涯を通じて句作に励みますが、1923（大正12）年脳出血で死去。碧梧桐は俳誌「海月」13号に寄せた追悼文で、「牛のやうに急がずあせらず、自分の行く道だけを行く事を怠らなかつた」と評しています。（学芸課／岡本美和）

＊1 波多野節子「洪命翁が東京で通った二つの学校―東洋商業学校と大成中学校―朝鮮近代文学者（日本）」。2002年1月



▲波静と慶應義塾正科卒業証書

バックヤードから

進入禁止サインの向こう側、バックヤードの奥の奥、資料整理の現場についてご紹介します。

あつめる 主軸は郷土の文学資料

当館では、高知県ゆかりの作家や文学者に関する資料を中心に収集し、展示や調査研究に役立てています。寺田寅彦、宮尾登美子など、高知県を代表する作家の資料はもとより、郷土に根ざした多彩な文芸誌・研究書等、高知の文学を研究するうえで必要な資料の充実に努めています。

たもつ 資料を守り、未来へ繋ぐ

資料保存担当でもある私たちは、貴重な資料を後世へ伝えていくという意識を忘れず、収蔵資料の損傷・劣化が進行しないよう、予防保存に力を入れています。様々な材質の収蔵資料を適切な資材を用いて、適切な方法で保存することを心掛けています。また、日頃より展示室と収蔵庫の状態を調査し、全職員で調査結果を共有。当館の収蔵資料に適した展示室と収蔵庫となるよう、環境を整える取り組みをしています。

いかに 情報公開、資料譲渡はじめました

当館ホームページに「収蔵資料検索」ページを新設、雑誌の検索が可能となりました。現在、検索可能な資料は約1万9000件。なかでも特色ある資料群と位置付けているのが高知で発行された郷土雑誌の数々で、ただいま全誌の情報公開

学芸課資料整理班

を目指し、鋭意データ作成中です。また、前述の収集方針からやむを得ず永年保管を見合わせた資料について、当館ホームページで告知後自由配布し、地域の皆様にご活用いただいています。

※寄贈者の皆様には、収蔵対象外となった場合の取り扱いについて当館にご一任いただいています。

＋α 支えられています

当館の資料整理担当職員は2名ですが、＋αな存在がカルチャースポーターのみなさん。データ入力や資料の保存作業をお手伝いいただいています。また、博物館実習やインターンシップの実習生にも書架の整理等に取り組んでいただいています。

資料整理の仕事はすぐに成果が出るというものではなく、多くの場合、数年後、数十年後に真価を発揮します。展示や研究対象として資料に光が当てられるその時のために備え、整え、保つのが私たちの仕事。縁の下で地道にコツコツの毎日です。

（学芸課／小松路代・楡垣佳甫）



▲郷土雑誌書架

猪野睦さんの思い出

敬愛する猪野睦さんが逝つてはや二か月。ともに1931年生まれ、満州事変以来の一五年戦争を潜ってきた世代である。

周知のように猪野さんは、高知のプロレタリア文学、特に1930年代の治安維持法下、生死の狭間にあつて反戦、平和を訴え続け、ペンを捨てなかつた高知の無名の詩人たちに温かい光を当て、資料を博搜、かれらの埋もれた事蹟の発掘、研究、顕彰に長年心血を注いでこられた。

筆まめで達意の名文家、猪野さんの渾身の「労作」埋もれてきた群像『文学運動の風雪』、簡明な「解題」付き好編著『土佐プロレタリア詩集』『榎村浩詩集』（草の家版）榎村浩著『日本詩歌史』などは、今後も高知の文学研究の規範、必読の書であり続けるであろう。

私が猪野さんを知つたのは、大逆事件で刑死した幸徳秋水の墓前祭の折で、猪野さんは淡々とあるメッセージを読み上げておられた。私は「室戸岬西にまがればうらがなし高知の浜の白き砂見ゆ」などを詠んだ明星派の文人平出修が、大逆事件の弁護人であり、事件に取材する小説『逆徒』（発禁を書いていることから秋水に接近していた。今にして思えば、秋水・大逆事件は猪野さんと私をつなぐ赤い糸であつた。

1994年の夏、所属する日本社会文学会と中国側の共催「満州国とは何だったのか」がテーマの日中文学シンポジウムに猪野さんと参加。広大な満州（中国東北）各地

高橋 正

をバスで歴訪の途次、榎村の名作「間島バルチザンの歌」にある満鮮国境の白頭山（中国名 長白山）に登つた。そのときの感慨は忘れられない。荒涼たる山容、山頂のカルデラ湖天池からの瀑布に私と猪野さんははしはし茫然と見とれていった。

猪野さんはその後、学会の「満州」期の文献調査で何度か渡満。日本兵一万八千が異国の草原に骸を曝した悲劇、ノモンハン事件（1939）に取材する詩集『ノモンハン桜』（壺井繁治賞）は詩人猪野さんの片鱗を示す。思い出は尽きないが、故猪野睦さんに感謝しつつ筆を擱きたい。（高知高専名誉教授）



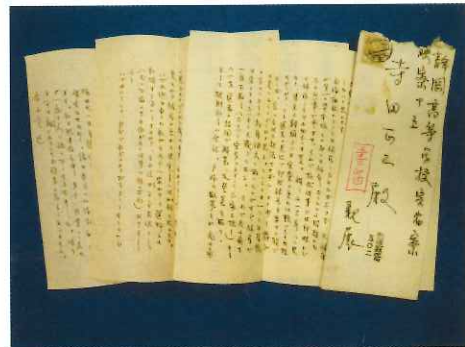
▲白頭山(長白山)を背に猪野睦氏(右)と筆者

資料受贈報告

寄贈資料から

寺田正二あて寺田寅彦書簡

西野和子氏寄贈



寺田寅彦（遺族より、寅彦の次男・正二にあてた書簡16通、夏目漱石が留学前に寅彦に送つたはがき1通、寅彦の描いた絵3点をご寄贈いただきました。絵以外はすでに全集に掲載されているものですが、資料の状態の良さから、ご遺族が大切に保管されていたことがわかります。正二あての書簡は、正二が静岡高等学校に入学する昭和2年から昭和7年の間に送られたものです。高校入学にあつて勉強と健康の大切さを説く手紙に始まり、仕送りのこと、健康の優れない息子への心配、借金を今後しないようにという小言、人に迷惑かけないようにという忠告などが寺田家の日常報告と共に記されています。随筆や科学論文で目にする偉大な科学者・随筆家としてではなく、

受贈報告(平成30年7月〜10月)敬略

- ▼嶋岡 展「詩人の遠征10 悲劇的肉体 ジュニール・シムルウイエル著 嶋岡 展訳 洪水企画刊」
- ▼中脇初枝「神に守られた島 中脇初枝著 講談社刊」他
- ▼田島征彦「そうべえときむな〜 たじまゆきひこ 作 童心社刊」
- ▼森下一仁「冒険小説 宝島探険 森下雨村著 書肆盛林堂刊」
- ▼小松弘愛「詩と思想・詩人集2018 「詩と思想」編集委員会編 土曜美術社出版販売刊」他
- ▼山本清水「詩集 静かな時の響きとめて 山本清水著 清樹社刊」
- ▼根津真介「詩集 木の根道 根津真介著 土曜美術社出版販売刊」他
- ▼葉名尻竜一「立正大学文学部学術叢書04 文学における〈隣人〉―寺山修司への入口― 葉名尻竜一著 角川文化振興財団刊」
- ▼国民みらい出版「現代短詩型文学作品集 よみびと第弐集 国民みらい出版編刊」
- ▼河出書房新社「文藝別冊 KAWADE 夢ムック「没後10年記念特集」氷室冴子 私たちが愛した永遠の青春小説作家 岩崎奈葉編 河出書房新社刊」

ひとつの家庭の父としての寅彦の顔が見えてくる書簡群です。

ここに挙げたのは入学間もない1927(昭和2)年5月24日の書簡です。体調が良くないという正二の報告に対してかなり心配した様子でさまざまなアドバイスを記し、近いうちにそちらに行つて医師と相談するなど書く一方で、「親にやい／＼云はれてしぶ／＼薬をのみ、云はれねばのまなかつたりするやうな、子供時代の甘たれた心持はもうそろ／＼脱却して健康と精神の養成を自分の意志の力でするやうな心持にならなければいけません」といった厳しい言葉なども見られます。寅彦が優しくもまた厳しい姿勢で子どもたちを導く父であつたことがわかります。

(学芸課/川島楨子)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

第21回児童生徒文学作品朗読コンクールを開催しました!

高知県立文学館では、毎年、県内の小中学生を対象にした朗読コンクールを開催しています。21回目を迎えた今年も、8月の地区審査（西部、高知、東部）を通過した23名の生徒さんが県審査に出場、一人一人の表情豊かな朗読により、会場は静かな熱気で包まれました。中には、このコンクールに毎年継続して参加してくれている生徒さんもたくさんいて、その成長の様子に出会えることも、主催者としての楽しみのひとつでもあり、また、生徒さんたちの朗読を通して、文章を声に出して読むことの魅力と大切さに気付かせてもらえる時間でもあります。

また、今年のコンクールでは、特別審査委員に児童文学者の横山充男先生をお迎えし、「ことばは生きています」と題して記念のご講演をいただきました。ご自身の体験からことばに敏感になった、と



▲表彰式の後、素敵な笑顔で記念撮影

審査結果は以下のとおりです。(敬称略)

金賞	高知大学教育学部附属小学校 6 学年	植村 聡	汰朗
特別賞	横山充男賞 土佐女子中学校 3 学年	坂本 佳穂	穂
特別賞	高知県教育長賞 安田町立安田小学校 4 学年	小松 慎	里
郷土文学賞	高知市立潮江東小学校 6 学年	山中 紗奈	奈
銀賞	土佐市立蓮池小学校 6 学年	森田 蘭	礼
	土佐女子中学校 3 学年	金子 賀	陽
銅賞	高知市立鴨田小学校 3 学年	古山 賀	陽
	高知市立初月小学校 1 学年	山口 優	莉
	いの町立枝川小学校 4 学年	林 優	莉
	高知大学教育学部附属中学校 1 学年	川田 真	菜
	土佐塾中学校 2 学年	松原 璃	子

その他、12名の方が入賞されました。

おっしゃる横山先生のお話は多くの示唆に富んでいて、私たちは、普段何気なく使っていることばにおいても、微妙なニュアンスの違いを感じ取りながら自分自身が使う言葉を選んでいく、ということに気づかせてくださいました。会場の皆さんと対話をしつつ進められた講演会は、終始和やかな雰囲気、話されることばの一つ一つがくっきりと立体的に浮かび上がってくるような、そんな感覚に包まれた貴重な1時間でした。

今年も、参加してくださった児童生徒の皆様をはじめ、保護者の皆様、学校の先生方、そしてたくさんの方々のご協力のおかげで、朗読コンクールを開催することができました。心から感謝申し上げます。

(学芸課 道脇夕加)



安岡章太郎展 ―〈私〉から〈歴史〉へ 開催!

平成31年1月26日(土)～3月24日(日)

2019(平成31)年1月16日(土)から3月24日(日)まで、企画展「安岡章太郎展 ―〈私〉から〈歴史〉へ」を開催します。

安岡章太郎は、高知生まれですが、陸軍獣医だった父の仕事の関係で、各地を転々としており、高知での生活は、誕生から2ヶ月間ほどでした。

しかし、高知は父母の故郷であり、1997(平成9)年から5年間は、当館の名譽館長も務めてくださいました。

そのような縁から、今回、開催させていただくこととなりました。

初日の1月26日は、安岡章太郎が亡くなって6年目の命日であり、お嬢様の治子さんの誕生日でもあります。

なんとも、感慨深い一日となりそうです。

安岡章太郎は、近代社会の抑圧や束縛を嫌い「劣等生」「ナマケモノ」を自称していました。学校や軍隊や病院などで繰り返される様々な出来事に、反発し、傷つきながらも、彼は生かされてゆきます。

安岡が作家を志した20歳の頃、日本はすでに戦時下でした。戦中戦後の長い混乱を経た1951(昭和26)年、彼は「三田文学」に「ガラスの靴」を発表し、世間の注目を集めました。

以後、芥川賞受賞作「悪い仲間」「陰気な愉しみ」、母の死を題材として高い評価を得た「海辺の光景」などの小説のほか、ユーモアあふれるエッセイでも読者を魅了し、〈第三の新人〉の旗手として活躍しました。

後年になると、その眼は過去へと向けられ、時代と人間の関わりを緻密な検証と深い洞察

力を通して作品を描いてゆきます。特に父方の祖先が辿る数奇な運命を描いた『流離譚』は、歴史のうねりの中で〈私〉の根源を探るという視点から取り組んでおり、この作品によって彼の自己確認の試みは結実した、と言っても過言ではないでしょう。

今回の展覧会は、公益財団法人神奈川近代文学館での展示をもとに安岡章太郎の生涯と文学の軌跡を総合的に辿りたいと思います。さらに当館では、高知の歴史を背景として、安岡章太郎が高知をどのように見ていたか、彼の作品を通して検証したいと思っています。

安岡章太郎にとって、高知とはどのような場所なのでしょう。彼は父母の故郷でもあるこの地をどのように見ていたのでしょうか。なぜ「僕にはふるさとがない」と書きつつ、安岡家のルーツを調べ、作品として世に送り出したのでしょうか。

作品を通して、それらの疑問は解かれてゆきます。

「安岡章太郎の原点は高知にある。」そんな思いで展覧会に取り組んでおります。

多くの皆様にご来館いただければ幸いです。

(学芸課長/津田加須子)



▲安岡章太郎著『流離譚』上下

シヨップより

文学館から見える藤並の森にも落ち葉が散り始め、いよいよ冬の訪れを感じます。そろそろこたつが恋しくなる季節ですね。私は寒くなると冬ごもりと称して色々なものを揃えたくなくなってしまいます。

当館ミュージアムシヨップでは全国的にも珍しい、木材を使用した「もくレース」のコースターを販売しています。高知県産の嶺北杉にレース模様が施されたコースターは、繊細で美しいけれども木を使用しているため、どこか温かみのある可愛らしさがあります。

冬の寒い日にはもくレースのコースターにお気に入りのマグカップを置いて、ティータイムを楽しませてはいかがでしょうか。

当館にお越しの際はミュージアムシヨップにもお立ち寄り頂き、ぜひお手にとってご覧になってください。

(総務事業課／北川智絵)



●木洩れ日コンサート開催しました♪

11月3日、澄み切った秋の日の午後、「寅彦先生に学ぶ天災展」にあわせ、文学館前の藤並の森で木洩れ日コンサートを開催しました。

木洩れ日コンサートは、NPO法人 こうち音の文化振興会主催のもと、文学館や高知こどもの図書館・高知聖パウロ教会等を会場に、今年で5年目を迎える事業です。今回は企画展に合わせ、「三毛の墓」(寺田寅彦作詞作曲)のほか、寅彦が知人に聴かせた「菩提樹」「魔王」を山本幸雄氏の独唱でお楽しみいただきました。ほかにも季節に合わせた童謡や、「アメージング・グレース」などを、ソプラノとフルート・マリンバで演奏しました。

「男声独唱版の「三毛の墓」は初めて聞いて嬉しかった」といったお声をはじめ、「秋の日の優しい午後のひとときでした」「小鳥の声も聞こえ癒された」などのお声をいただきました。

今後も、地域施設との連携の中で、音楽と文学を結びつけたイベントにも力を入れていきたいと考えています。

(学芸課／野々村昭美)



▲コンサートのようす

館長室から

文学と漫画

岡崎 順子

半世紀も前の話。

私の子ども時代、ハードカバーの「少年少女文学全集」なるものが本棚の主役の座を占めていた。一方で、それ以上にわくわくしながら読んだのが漫画。しかしこちらは何故か大人の受けがイマイチ。なかなか、主役にはなれなかった。

時を経て、現在。

我が家の子どもの部屋には、〇〇全集なるものは見当たらない。あるのは、様々な分野のハードカバー、文庫本、そしてコミックといわれる漫画本の数々。子ども世代には、漫画はすでに主役の一人なのだと思った。

さて、「文豪ストレイドッグス」という漫画をご存じだろうか？

一言で言えば、太宰治などの文豪の名を持つ不思議な能力を備えた登場人物達が活躍する漫画なのだが、文学との関係性は極論ではあるがその名前のみ。中高生、大学生、若者を中心に大人気となっている。

当館では、この人気に着目して、秋から冬にかけて、この漫画の登場人物を絡めつつ、探偵小説に焦点を当てた企画展を開催する。いわば主役は、文学と漫画の二人である。

今回の企画が、とりわけ、本離れ、活字離れが著しいといわれる中高生、大学生、若者の感性と創造性を引きつけることを願ってやまないが、多くの方々にも、漫画と文学のコラボレーションが見せる意外な側面をご覧いただくことで、新たな文学の魅力と楽しみ方を体感いただける場になればと願っている。

年末年始のため、12月27日(木)～1月1日(火)は休館いたします。
 新年は**1月2日(水)**より開館いたします。



企画展
案内

江戸川乱歩の華麗なる本棚

文豪ストレイドッグス × 高知県立文学館

11月17日(土)～平成31年1月14日(月・祝)
 ※12月27日～1月1日は休館となります。

場所:企画展示室 観覧料:500円

大人気作品「文豪ストレイドッグス」とのコラボ展。
 江戸川乱歩の業績や高知とのかかわりについてご紹介
 しています。詳細は表紙・2ページをご覧ください。



映画上映会 乱歩を観る!「黒蜥蜴」

原作:江戸川乱歩、監督:深作欣二、主演:丸山明宏(現:美輪明宏)の
 幻の作品をフィルムにて上映します。(1968年/松竹/86分)

日時:平成30年12月24日(月・祝)、平成31年1月6日(日)

場所:高知県立文学館 1Fホール 各日とも13:30～
 参加には当日の観覧券が必要。(高校生以下無料) ※定員各日とも50名
 ※事前に電話・受付(来館して直接)にてお申込ください。

朗読の会

江戸川乱歩のエッセイ・短編などを文学館カルチャー
 サポーターの朗読で楽しむイベント。

平成30年12月15日(土) 14:00～16:00(予定)

場所:高知県立文学館 1Fホール
 参加料:無料 ※当日、会場に直接お越しください。



先着
100名様

来年も文スト&文学館をよろしくね! クリスマスプレゼント!!

12月25日・26日の2日間に限り、当日ご覧いただいた方に春河35先生描き下ろし
 イラストのオリジナルポスターカレンダー(非売品/A2サイズ)をプレゼントします。

平成30年12月25日(火)、26日(水) 9:00～ 高知県立文学館 1階受付にて
 当日の観覧券ご購入の際にプレゼントをお渡しします。
 無くなり次第配布終了します。予めご了承ください。

先着
100名様

今年も文スト&文学館をよろしくね! お正月プレゼント!!

1月2日・3日の2日間に限り、当日ご覧いただいた方にアニメ描き下ろし
 イラストのオリジナルポスターカレンダー(非売品/A2サイズ)をプレゼントします。

平成31年1月2日(水)、3日(木) 9:00～ 高知県立文学館 1階受付にて
 当日の観覧券ご購入の際にプレゼントをお渡しします。
 無くなり次第配布終了します。予めご了承ください。

©2016 朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグス製作委員会
 ©2018 朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグスDA製作委員会

次回企画展 予告

安岡章太郎展 -〈私〉から〈歴史〉へ

平成31年1月26日(土)～3月24日(日) ※休館日なし
 場所:企画展示室 観覧料:500円

安岡章太郎(1920～2013)が亡くなられて6年になります。
 高知県立文学館では、安岡章太郎の生涯(学校と軍隊と病院)に
 象徴される、近代社会の抑圧や束縛を嫌い、“劣等生”“ナマケモノ”
 を自称した小説家の実像を探りながら、幅広い創作スタイルと巧みな
 描写に支えられた安岡文学の魅力を、神奈川近代文学館ご協力の
 もと、ご紹介します。 **詳細は7ページをご覧ください。**



©新潮社

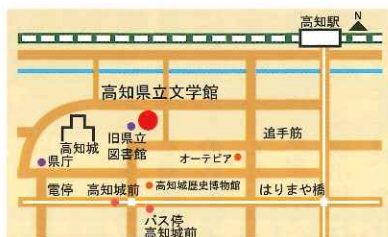
イベント情報

◆文学マイスター講座
【第7回】
12月22日(土)
14:00～15:30
「寺田寅彦の小惑星」(仮)
 講師:関勉先生
 (芸文天文学習館講師)
 参加無料・事前申込が
 必要です。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
 観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
 精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
 健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
 茶室「慶雲庵」
 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)「高知城前」下車、
 徒歩5分 または(高知駅行)「北はりまや橋」下車、徒歩15分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス、路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- 高知自動車道高知インターより車で20分
 (追手筋を高知城方面へ)



〒780-0850
 高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857



E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
 http://www.kochi-bungaku.com/